平成２５年１２月１５日（日）全国大会２日目

【分科会Ⅱ】

「福島の子どもたちの２年半～放課後児童クラブからのレポート」※吉本出席

（内　容）

東日本大震災後、福島の子どもたちの生活の変化とともに、身体や心への影響も心配されている。実際に福島の子どもたちを支援してきた放課後児童クラブからの報告。

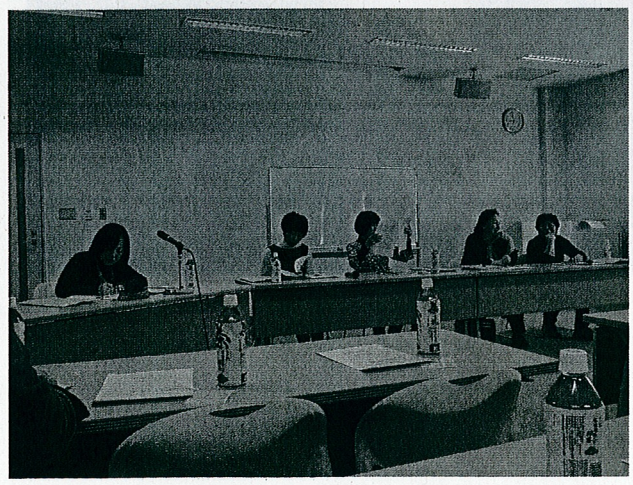
・児童クラブ指導員、保護者、行政職員から、震災直後の様子や震災後の対応、課題や問題などが報告され、気持ちの入った語り口であった。

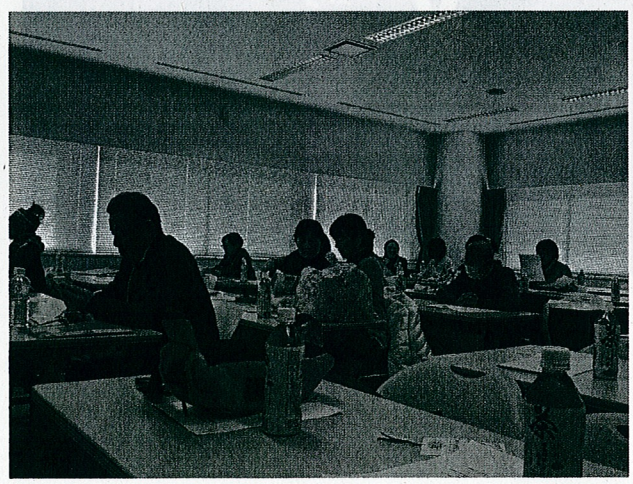
・震災後の子どもたちには、体力・運動能力の低下、肥満の増加、コミュニケーション能力の低下、学力の低下などが懸念され、早急かつ恒常的な取組として、運動・遊びの提供、より良い生活習慣の確立を施設・家庭・地域で拡大・展開していくことが必要である。

・福島の震災被害は、津波におそわれた海岸部、建物被害の多かった中心部、原発事故の放射能汚染のある原発周辺地域と、地域・地域で被害状況が異なり、復興への取組の難しさを感じた。

・被災地での児童クラブの復興については、開設場所の確保が困難であり、一度場所を設けても、すぐ別の場所へ移動しなければならず、開設場所を転々とする状況であった。また、被災者の中でも災害・復興・非難等の考え方が異なり、意見が対立することもあるため、児童クラブ活動をとおして、子どもたちだけではなく、保護者の心のケアも重要である。

・今回の報告を受け、あらためて児童クラブの防災対策・災害対応の重要さや、支えあいの心の大切さを感じた。また、地震・津波の被害や放射能汚染の影響により活動の制限が続く中で、子どもや子育て中の親への支援を継続的に実施しており、深く感銘を受けた。





「市民協働の視点で児童館を考える」※畠出席

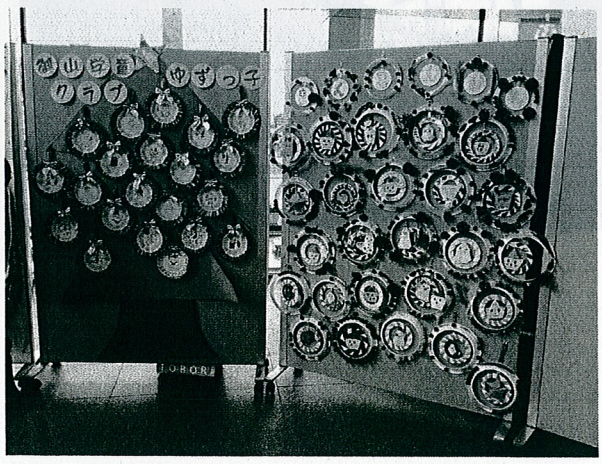
（内　容）

指定管理者制度導入後、多様な主体が児童館を運営している。仙台市の事例をもとに、市民協働の視点からこれからの児童館運営を考える。

・仙台市等の児童館・児童クラブ運営についての概要を報告いただき、今後の運営を考えるものであった。私自身、様々な分野で地域との関わりに携わっているが、児童福祉については初めてであり、今回標記の分科会に参加し、児童館・児童クラブの運営だけでなく、地域とのつながり、子どもたちの健全な育成、児童館の在り方等、深く考えさせられる内容であった。

・東京都台東区の児童館の紹介があり、点在する区内の児童館がそれぞれの特色（施設設備や活動内容）を持ち、児童はその時々によって自分好みの児童館を選んで行くことができ、非常に興味深いものであった。

・児童館・児童クラブは、「親が不在だから、親の都合で通っている」と子どもたちが感じるのではなく、「好きだから、楽しいから行きたい」いわゆる自分の都合で選んで行ける場所で本来なければならない。そのための魅力発信を行うとともに、子どもたちが自分の意思をもち、考え、行動し、自立していく姿を見守り、個性を尊重し支えていくことが大切である。

・厚生員・指導員は、異年齢集団、障害児対応、保護者対応、安全管理など、様々な専門知識と経験が必要であり、業務に求められる内容も複雑化、高度化、多様化している。職員の早期離職防止や資質向上を図るうえで、処遇改善の検討も喫緊の課題であると感じた。また、現場の職員と運営側がそれぞれの状況を共有し、児童館・児童クラブとして、関係者全員が統一した考え方と理念をもつことも大切である。

・地域を知り、関わりを強め、地域の活力を積極的に利用することも重要。児童館・児童クラブ、学校、保護者、地域住民が連携し、地域全体で子ども・子育て支援を行うことで、人々の絆が深まり、また新しい絆が生まれるのではないでしょうか。分科会のタイトルにもある「市民協働」は金沢の得意分野だと思います、今回学んだことを活かし、今後の児童健全育成の推進に努めていきたい。